

「ハチ公について」

忠犬ハチ公の生まれ

忠犬ハチ公は大正 12 年 11 月にオスの秋田犬として秋田県大館市の斎藤義一宅で生まれた。そのころ東京帝国大学農学部教授であった上野英三郎博士が純系の日本犬を探しており、教え子の世間瀬千代松氏が部下の知り合いである斎藤氏から子犬をもらうことを思いついた。大正 13 年 1 月 14 日に生後 50 日前後の幼犬が上野博士のもとへ送られた。その犬はハチと名付けられ博士とともに食事をするほどに可愛がられた。

ハチ公が忠犬とされる所以

ハチは立派な秋田犬に成長し、博士の送り迎えもするようになった。大正 14 年 5 月 21 日博士は大学の教授会で講演中に脳溢血に倒れて亡くなってしまう。通夜、葬儀の間、ハチは食事を与えても口にせず、その状態がしばらく続いたという。

博士の没後浅草に引っ越した後も夜 8 キロ離れた渋谷方面に走っていくハチの姿がたびたび見られる状況が 1 年続いたため代々木に住んでいた顔なじみの植木職人の小林菊三郎宅に預けられることとなった。

夕食後は 700 メートルほど離れた上野博士の家のあたりをうろつき、その後渋谷駅の改札口前に座り続けた。ハチは人間や仔犬に対して牙をむけたり吠えたりしなかったが一度だけ他の犬にかみつかれ左耳が垂れてしまった。このようなハチの姿に次第に人々が同情を寄せるようになり駅職員も面倒を見るようになった。

ハチ公の最期

ハチは海外にも紹介されたり、映画になったりと有名になっていたがフィラリアにより昭和 10 年 3 月 5 日に容体が急変し 3 月 8 日に孤独に 13 年の一生を終えた。

ハチ公はこうして有名になった

昭和 7 年 10 月 4 日東京朝日新聞に「いとしや老犬物語」というタイトルでのったのをはじめ新聞、ラジオ等で報道されたハチのもとに人々から見舞金が送られ 11 月には日本犬展に招待犬として招かれるなどして全国的に知られるようになった。

それに伴って付近の住民から銅像の建設が提案され募金により今も観光名所として人々に親しまれているハチ公像がハチ公の生きていたうちに建造された。

個人的な感想

上の記述は大館市の観光向けページをまとめたものであるが、私はこれ以外にアメーバブログでハチ公のことを調べて記事にしている人のブログを読んだのだが、食い違う点がありあって、一番大きく食い違っていると思った点は、大館市のページでは「老いていく

ハチに人々が同情を寄せるようになり」と書いているのに対して、ブログでは「多くの人々が行きかう渋谷駅でじっとしているハチ公は犬を嫌う人などに疎まれ、駅員はハチに対して苦情を受けることもしばしばあり苦情があれば追いかねなければならぬので、ハチは水をかけられたり蹴られたりすることは日常茶飯事だった。それを知った日本犬保存会初代会長がいじめられているハチ公を憐れんで記事にし、それによって有名になったことで周りの人々が親切にし始めた。」というものだった。どちらが本当なのかは分からないし、実際にはその当時生きていた人々一人一人によっていつからハチにやさしかったかは違うと思うのでどちらも本当だともいえるが、同じ話も視点や書き方によって変わってくるので気を付けたいと思う。

参考

大館市 [http://www.city.odate.akita.jp/dcity/sitemanager.nsf/doc/
http://s.ameblo.jp/one111/entry-11279761549.html](http://www.city.odate.akita.jp/dcity/sitemanager.nsf/doc/http://s.ameblo.jp/one111/entry-11279761549.html)